文苑

偶作六首

佐々木信綱

なら林くぬぎのはやし一すぢの
　小川めぐれる我いへゐかな

山かげの我すむ家はせまけれど
　妻あり子あり春のかぜふく

なつかしき母のみ面わふと消て
　燈火くらしさみだれのおと

大寺のいらか高くも見ゆるかな
　里をつゝめる朝きりの上に

もろともに遊びし野邊よ池よ山よ
　又いつの世か共に見るべき

たゞよへる夕べの雲を仰ぎみて
　何とはなしに物ぞかなしき

鷄

竹柏會同人

増山三雪子

あかつきの夢おとろかす家つ鳥
　老はねざめの友とこそ聞け

板倉止子

時つくる其いさはしは世の中に
　庭鳥にますとりはあらじな

板倉藤子

賤の女がうたふ田歌も靜まりて
　書げいそがす庭とりのこゑ

松平岳子

庭鳥のしのゝめ告ぐる聲きよし
　疾く起出てゝ朝きよめせん

安東菊子

人もかくあらまほしけれ曉の
　八こゑの鳥は時をたがへず

堀越しな子

あなたにて鳴けば此方も聲あはせ
　ことありけにも庭鳥のなく

大村八代子

雛鳥をはぐゝむ親のさま見ては
わか身も更に親をしそ思ふ

佐藤朝惠子

送りこし人とわかるゝ村はづれ
庭鳥なきて夜はあけにけり

松浦島子

迷ひ入りしみ山の奥の一ついほ
人やすむらん庭とりのこゑ

中村文子

わからむと羽ばたきませる親鳥を
まちわびて雛のとやの内になく

白岩つや子

あすよりは背戸に放ちて遊ばせん
昨日かへりし庭とりのひな

久保花子

庭鳥をとなりの猫にうばゝれて
中たかひせるをさなどち哉

清水晴子

のら猫に子を奪はれし其夜より
わか庭つ鳥よなきそめたり

市田豐子

とんぼつる里の幼子うちつれて
ひなの庭鳥ふひちらしゆく

山本芳子

みな人は田畑にゆきて賤か屋の
静けき庭にはとりのなく

池谷久子

五月雨にをぐらくはあれと短夜の
早明ぬらしにはとりのなく

小林茂子

こがひするわざ忙しき一つ屋の
軒端まぢかく庭とりのなく

關屋愛子

竹垣もまばらにゆひし賤か屋の
うちとあらはに庭鳥あそぶ

池谷朝子

咲たわむ卯花垣根めぐりみれは
庭とりあそぶ川ぞひのいへ

清水錦子

山ふかく川きよきところ君と二人
庭とりかひて宿をしめばや　佐々木信綱

舟窓によりそひ見れは藁ふきの
家居みつ四つ庭とりのこる

琴の音

今宵の月に　鷺　水
里の小川に　あくがれて
誰がむすびけん　來て見れば
彼方の岡の　程遠き
かすかにもるゝ　伏やより
琴の音に
思ひ出けり　故里の君

此世の旅路

あはれ憂き世と　東くめ子
世をかこち

はかなきものと　身をなげく
余りに弱き　人の子よ
余りにもろき　人の子よ
此世の旅路　山たかく
この世の海路　波あらし
道けはしとて　泣くべきか
波あらしとて　なくべきか
ふるひたゝずや　人の子よ
叫ぶをやめよ　行路難
戰ひまけし　兵のごと
憐をこふ　人のごと

蝶

胡蝶や胡蝶やせこてふ　小畑いく子